



コスタリカ国草の根技術協力

「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業活動報告」

No. 16

2017.1.5

～歩き始めた改善～

NPO 法人イフパット 研究員 小林沙羅  
(現地調整員/生活改善ファシリテーター)

順番が錯誤してしまいますが、前回セバディージャ村で行った振り返りの結果で、既に何人かが台所やカマドを改善し始めていることがわかり12月に早速家庭訪問をしてきました。リーダー的存在のフローリーの家では、クリスマス用の豚とそれぞれ卵、肉用の養鶏が行われていました。また小さな家庭菜園でインゲン、ピーマンが実をならせていました。当初家庭訪問をした際に鶏舎や豚舎は使われておらず、朽ち果てそうになっていました。彼女は生活改善グループに参加することで、意欲を取り戻し以前行っていた養鶏と養豚を再開したということです。

講習会を行ったコンポストもきちんと管理されており、近くでは鶏を増やすためのヒヨコが鳴いていました。家の中はペンキが塗り直され、念願の台所もすっかり明るい雰囲気になっていました。彼女は一度は台所改善を計画したものの、政府の住宅援助の事業に申請すれば新しい



家を建てられるから、と言って止めていました。しかし、援助を待っている間に自分で出来ることをしようとペンキ塗りを行い、次はカマドの改善もしたいそうです。



フローリーの台所 (改善前)



改善後 (壁がオレンジ色に塗られています)

2 軒目に行ったのは、ブランカの家です。振り返りでは、カマドを改善し「とても良い」の自己評価でした。訪問するとカマド自体の改善ではなく、以前は台所と2メートルほど離れていたカマドで豆と肉を調理していたのですが、肉用のカマドを新たに台所の壁際に作り、屋根を付けていました。改善の前は、肉を料理する毎に台所とカマドを何往復もし、雨と乾季の陽射しに悩まされていたということでした。今では台所からすぐに火にかけられるため、時間の節約にもなっていると話してくれました。



こうして個人レベルの改善が少しずつ展開していく中で、セバディージャ村ではグループとしての団結も高まっています。今一度グループとして何を目指し、今後どのような活動を行っていくのかを話し合うために、第二回目のワークショップで実施した「幸せの木」を再度実施しました。この手法はどちらかと言えばグループとしての上位目標（幸せになる）の確認と、幸せになるためにはお金をかけずとも家族、環境、仕事、教育などを改善することで実現できるという気付きを促すためにオロティナのファシリテーターのチームでは取り入れていました。「幸せの木」を通じてでている本音から課題の絞り込み、活動計画の実施に繋がられるのではないかとというアドバイスをいただき、再度実施に至りました。

約半年ぶりに行った「幸せの木」では変わらず、グループが幸せになるためには家族や地域との関係、信仰や健康を重視していることが確認された上、具体的なアクションに繋がるテーマも挙がってきました。例えば健康に関しては、自分達で畑をし野菜を消費する、休息時間を十分取るといったことが挙がりました。これらは既に活動として家庭レベルで実施されてきましたが、運動や栄養についての勉強はまだ行っていないなど次のアクションに繋がる結果が見えてきました。「幸せの木」をさらに分析し、次回はグループの改善計画を具体化していきたいと思えます。

【図：「幸せの木結果一部】

